観光家陸奥さとしと語る聖徳太子と蘇我馬子と親鸞　　（西念寺住職誕生日法座）

〇聖徳太子像　（本願寺派寺院の左余間）
　山城仁和寺所蔵の十六歳の画像を模したもの
　　二十五條の袈裟　柄香炉
　　物部守屋を征伐し、四天王寺建立を計画し、仏法興隆を祈願したすがた。
画讃
　吾為利生出彼　衡山入此日域　降伏守屋邪見　終顕仏法之威徳
（われ利生のために　かの衡山を出でこの日域に入る。守屋の邪見を降伏し、ついに仏法の威徳を顕わさん。）

※衡山（こうざん）…湖南省にある山。南岳（なんがく）ともいう。ここで活躍した天台宗の第二祖慧思が聖徳太子に生まれかわったという伝説にもとづく。

〇親鸞聖人の聖徳太子に関係する著作

・『尊号真像銘文』皇太子聖徳銘文　（八十三歳）
・『皇太子聖徳奉讃』　七十五首　（八十三歳）…『四天王寺御手印縁起』、『十七条憲法』等によって作成。
・『大日本国粟散王聖徳奉讃』　百十四首（八十五歳）…『三宝絵詞』を主に『聖徳太子伝暦』を補助にして作成。
・『上宮太子御記』（八十五歳）…『三宝絵詞』を中心に作成された太子伝。
・正像末和讃の内の皇太子聖徳奉讃　十一首　（八十六歳前後）…門信徒に広く流布した三帖和讃に含まれるもの。

〇親鸞の夢告と聖徳太子（救世観音）

１、親鸞十九歳　磯長の太子廟（現在の南河内郡太子町の叡福寺）＜高田系の伝説、諸説あり＞
　建久二年（１１９１）９月１４日の夜、聖徳太子が善信（親鸞）に告勅して

　我が三尊、塵沙界を化す　日域は大乗相応の地なり　諦聴せよ諦聴せよ　我が教令を
　汝が命根、応に十余歳なるべし　命終して速やか清浄土に入らん

善信、善信、真菩薩

われらが三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）は、あらゆる世界の人々を教化して救いとる　日本は大乗がひろまるのに相応しい土地である　あきらかに聞け　あきらかに聞け　私の教えるところを　お前のいのちはあと十年ちょっとである　いのち終わってすみやかに浄土に入るであろう　よく信じよ　よく信じよ　真の菩薩を

太子廟…三骨一廟　ここで出土したとされる廟窟偈は『三骨一廟文』『上宮太子御記』に掲載

『三骨一廟文』…私の身は救世観音　定慧契女は大勢至　わが身を生育する大悲は西方の教主阿弥陀如来　末法の世のたくさんの衆生を救うために　父母からいただいた生身の身体を　勝れた場所であるこのお墓にとどめる　三つの骨を一つのお墓におさめるのは弥陀・観音・勢至の位である

聖徳太子…救世観音　　妻（膳部大郎女（かしわべのおおいらつめ））…勢至菩薩　母（穴穂部間人皇女）…阿弥陀如来

親鸞入胎の夢…五葉の一本松が胎内に入る　幼名　松若丸

２，親鸞二十八歳　比叡山の南、無動寺で正治二年（１２００）１２月末に
如意輪観音から
善きかな　善きかな　汝の願いはまさに満足しようとしている
善きかな　善きかな　わが願いもまた満足する

３、親鸞二十九歳　京都の六角堂にて　建仁元年（１２０１）４月５日の午前４時ごろ
六角堂の救世菩薩が、端正な顔だちの僧侶のすがたをとって、しろい袈裟をつけて、大きな白い蓮の花にすわって、親鸞に言われた

行者宿報設女犯　我成玉女被犯　一生之間能荘厳　臨終引導生極楽

仏道を修行するものが、過去の業の報いによって、戒律によって禁じられている女性とのむつみあいをすることがあっても、わたしが玉女になってひきうけていきましょう。一生のあいだ、あなたを善業によってお守りして、臨終になったら浄土へと導いてあげましょう

救世菩薩はこの文をよみあげた後、おっしゃるには　この文はわが誓願である。すべての生きとし生けるものに説き聞かせなさい。このお告げによりて数千万の人々がこれを聞くことになるだろうと思ったら、夢からさめた。

この後、法然上人のもとに１００日通い、「法然上人にだまされて地獄におちても後悔しない。なぜなら、どんな修行をしても仏になれるどころか、地獄をまぬがれない私だからです。そういうものを必ずお救い下さる南無阿弥陀仏のおこころに出会いました。」と迷いの原因である自力が死んで、お浄土間違いない身、正定聚の身になられました。

回心　二度生まれ

『上宮太子御記』…親鸞聖人がお作りになった聖徳太子の伝記

おしゃかさまがお悟りをひらかれた日から、涅槃に入りお亡くなりになられた時まで、お説きくださったたくさんのみ法は　ひとつも真実ではないものはありませんでした。

はじめには華厳経をお説きになり、かしこい菩薩に理解させなさりました。太陽が出て、まず高い山の頂上を照らすようなものです。つぎに阿含経を説いて、おとった声聞にしらしめました。太陽が高くなって、ようやく深い谷を照らすようなものです。またいろんな所で、大乗のさまざま経をお示しになりました。仏は一つの音を説いたのだけれど、衆生がそれぞれの性格にしたがって理解することは、一つ味の雨が平等にふりそそいでも、草木の大小にしたがって、受けるところが同じではないようなものです。十六に分けられる般若の空のさとりを教え、４０余年ののちに法華の妙なる道をひらかれました。鷲の峰（霊鷲山）でおもいがあらわれ、鶴の林のなかで声が絶えたときより、迦葉は詞を鐘の音に伝え、阿難は身をかぎの穴にいれて、ついにえらばれた千人の羅漢（悟った人）を集めて、記憶に残したお釈迦様一代の教えです。

それよりのち、二十数人の聖者がうけ伝え、十六の国の王さまがひろめ守りなさいました。釈尊は亡くなったけれども、教法はすでにとどまっていて、薬をおいて医者が去っていったようなものである。煩悩をとりのぞくことができないものがいるでしょうか。ランプをかけて親友が去るようなものです。つぎは無明の酔いをさますべきです。

そもそもインドは仏のあらわれて法を説いてくださった場所、中国は法が伝わって、広まる国です。ふたつの国をみてみると、だんだん、仏法が乱れている場所です。７８８年に中国の玄奘三蔵が天竺に修行しにいかれたとき、鶏足山のふるいみちは竹がしげって人もかよわず、孤獨園の昔の広場には、建物もなく僧侶もすまなくなっていました。マガタ国に行って菩提樹院をみれば、昔、国王がつくった観音の像がありました。像はほとんど地の底に入ってしまい、肩より上がわずかに出ているだけでした。仏法が滅びおわるときに、この像

は完全に埋まってしまうといわれました。
　また中国にも聖者がおおく、仏道がさかんであるけれども、いよいよみだれる時があります。後周の末のころに、おおいに魔の風がふき、まさに仏法の灯火が消えそうになった時、霊禅という僧侶が世を悲しんで、この身を恨んで、いのちをすてました。
（省略）
ああ仏滅ののち、像法のころに至って、中国にはじめて漢の時代にインドより伝わり、わが国にはおそく欽明天皇の代に百済より伝来しました。私はいまたなごころを合わせて、法のたえなることをあらわします。

昔、上宮太子という聖者がいらっしゃいました。用明天皇がはじめて親王となった時に、穴太部の間人皇女からお生まれになった王子です。最初、母の夫人の夢に、金色の僧侶があらわれて、「私に世を救いたいという願いがある、あなたのお腹にやどりたい。私は救世菩薩である、家は西方にあるといって、口の中にはいってきて、懐妊なさった太子です。
太子のおじさま敏達天皇のが、天下を治められた最初の年の元日に、夫人が宮中をめぐられて、馬小屋のもとにたどりついたときに、するっとお生まれになりました。そしていそいで、寝殿にいたってみると、急に明るい光が西よりせまってきました。お体はなんともいえないいい香りがします。4ヶ月でよくおしゃべりをするようになりました。あくる年の２月１５日の朝から、たなごころをあわせて、東にむかって南無仏といって拝まれました。
　太子六歳になったときに、百済国よりはじめて、尼が経論をもってきました。太子は天皇におささげになりました。伝わった経論を見ると、お香をたいて読みおわって、また天皇におささげになりまいした。月ごとの八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日これを 6 斎としました。この日は梵天が帝釈天の国のまつりごとをご覧になる。もののいのちをころすことをとどめなさいと。天皇はよろこびなさって、天下に詔をくだしなさって、この日々にはものをころすことをおとどめになりました。
　八年の冬、新羅国より仏像がおさめられました。太子、天皇に申しあげました。釈迦牟尼仏の像でございますと。新羅国より、日羅という方が来られています。身が光かがやいていました。太子はひそかに、身分のひくいものの服をきて、たくさんの子どもたちにまじわって、難波の館にいってこれをご覧になると、日羅が太子を指さして、不思議がりました。太子はおどろいて立ち去りました、日羅はひざまづいて、たなごころをあわせて「敬礼救世観世音、伝灯東方粟散王、従於西方来誕生、皆演妙法度衆生」といって、日羅はますます身から光をはなちました。太子はまた眉間より光を放たれました。
　また百済より弥勒の石像がわたってきました。大臣蘇我の馬子の宿禰はこの像をうけとりました。家の東に寺を建て、像を安置して、とうとびうやまいました。尼三人をともなわせて、供養させました。大臣はこの寺に塔をたてました。太子がおっしゃるには「塔はこれ仏舎利のいれものです、釈迦如来のお舎利が自然に出てくるでしょう。大臣はこれを聞いて祈っていると、斎食の飯のうえに仏舎利一粒がでできました。瑠璃ガラスのつぼにいれて、

塔に安置しておがみました。太子と大臣とこころをひとつにして三宝をあがめました。

この時に、国内に病が流行って、死ぬ人がたくさんでました。大連物部の弓削の守屋と中臣の勝海がともに天皇に申し上げるには、わが国はもとより神だけを尊び拝んできました。それなのに、蘇我の大臣は仏法とかいうものをさかんにしようとしている。このせいで、病が世にはやり、人民がみな息絶えてしまう。これは仏法を禁止するしかありません、そうすれば人々のいのちは助かるでしょう、と天皇に申し上げました。みかどはみことのりによって、おっしゃるには、守屋が申すことはもっともだ、はやく仏法を禁止せよと宣言されました。

太子は天皇に申しあげました。守屋と勝海の二人は因果のことわりをわかっていません。よいことを行えば幸いがおこり、わるいことをおこなえば災いがおきます。この二人はかならず災いにあうでしょう。

しかれども天皇の命令によって、守屋の大連を寺につかわして、お堂や塔をこわし、仏典を焼きすてました。焼けのこった仏像を、難波のほりえに捨てました。三人の尼は責めたてて、追い出しました。この日は雲がないのに大風がふき、雨が降りました。

太子は、災いはきっとおこるでしょうとおっしゃいました。この後に瘡の病が、世におこって、病に苦しむことは猛火にやかれるような状態になりました。ふたりの大臣は重い罪を悔やんで、天皇に申し上げるには、私たちは病に苦しむことに耐えられません、なんとか三宝にいのっていただきたいですと。天皇は命令して、三人の尼をよび、二人の大臣のために祈らせました。また本堂や塔がなくなってしまっていたので、また仏法を再興させました。これより仏法はだんだんとさかんになっていきました。

太子のお父さまである用明天皇がみかどの位につきました。二年がすぎたころ、わたしは三宝に帰依したいとおっしゃいました。蘇我大臣はわかりました、おっしゃるとおりにいたしましょうと申し上げ、法師をよんで宮中に入れました。太子はよろこんで大臣と手をとりあって、涙をながしておっしゃいました。三宝のすばらしさを人々はまだ分かっていないのに、大臣はそのことをわかってくれた、なんとうれしいことかと。

ある人がひそかに守屋の大連にいいました、今こそ計画を実行にうつす時、軍隊を準備して、助け合いましょうと。守屋の大連が天皇を呪っているということがひろまっていきました。蘇我大臣は、太子さま軍隊をひきいて守屋の大連を討ちましょうといいました。守屋も挙兵して城にたてこもり、ふせぎました。戦いの中、守屋の軍は強くいきおいがありました。味方の兵士は恐れおののきて、三度も退却してしまいました。

このとき、太子は御歳十六でした。将軍のうしろに立って、軍の指揮をとりました。また家臣の秦河勝に、白膠木（ぬるで）によって、四天王の像を彫らせて、それをもとどりの上にさして、矛の先にささげて願いをおこして、おっしゃいました。われらを戦に勝たせたまへ。しかれば、四天王の像を安置し、塔や寺を建てようと。馬子大臣もおなじように願い、戦いました。

物部の守屋の大連は、いちい（水松）の木にのぼって、物部氏の守護神の大明神にいのり

ちかって矢をはなちました。太子のあぶみにあたりました。太子は舎人迹見赤檮（とねりとみのいちい）におっしゃって、四天王に祈って矢を放たしめました。はるかに守屋の連がむねを突き刺し、守屋はまっさかさまに木よりおちました。物部軍はみだれて、破れさりました。せめていって守屋の首をとりました。物部のもつ財産や土地を全部寺のものにして、玉造の岸の上に四天王寺を建てました。これによって仏法はいよいよ盛んになりました。

（長いのでまとめ）
推古天皇の世になる→百済の国から阿佐という王子がきて、太子にむかって拝んで「救世観世音菩薩さま　あなたは東のはて日本国に妙なる教えをひろめ、四十九歳までつづけられるだろう」→太子眉間より光を出して、黒い馬で信濃の国まで飛んでいく→推古天皇の御前で勝鬘経を講義→講義のあと花がふってくる→みかどがその土地に橘寺をたてる→小野妹子に中国の衡山に過去世に慧思だったころに置いてきた法華経をとりにいかせる→まちっがていたので三昧に入って自分で取りに行く→つぎの日枕元にある→お妃に死ぬ時は一緒のお墓にはいろう→明日の昨夜に死ぬことを予言→初めがあれば終わりがあるのはものの道理である、一度生きれば一度死ぬのは避けられない道である、私は生まれ変わりしながら仏道を修行し、ひろめてきた。小さい国の太子になって、仏法を広め、仏法のないところにすべてのものが救われる教えを説いた。このような濁りきった世には長くいたいとは思わない→乞食に着物をやる→和歌をよむ→夫婦でいっしょに死ぬ→黒駒がいなないて死ぬ→中国の衡山からとってきた経は消える→新羅からきた釈迦像はやましな寺の東の堂に→百済の弥勒は京元興寺に→太子は四天王寺・法隆寺・元興寺・中宮寺・橘寺・蜂岳寺・池後寺・葛城寺・日向寺を造った→太子は３つの名前がある。一は豊聰耳の皇子、厩戸に生まれて一度に十人の訴えを聞き、おこたえになる。→二は聖徳太子、生まれなさってからの様子が僧侶のようである、勝鬘経・法華経を講説し、人々を救う→三、上宮太子、宮殿の南にすんで政治をまかされていたから。太子御記文と廟窟偈の引用。